

京都芸術 センター 通信

KYOTO ART CENTER
NEWSLETTER

January 2019
Vol.224

発行 | 京都芸術センター
2018年12月20日

01

Profile

川瀬亜衣(かわせ あい)

1987年京都市生まれ。京都造形芸術大学芸術表現・アートプロデュース学科卒。2010年より写真・インスタレーション作品を制作発表する傍ら、千日前青空ダンス倶楽部で踊り始める。近年は、黒沢美香、きたまり/KIKIKIKIKIKI、あごさとし、akakillike、ANTIBODIES Collective等の作品に出演、自作舞台作品の上演も行う。2018年上演企画SAILINGを開始、自身の活動として「書き文字」を踊ることをはじめる。

ゆざわさな

1993年秋田県生まれ。立命館大学文学部卒、神戸大学大学院博士課程に在籍。3歳からモダンバレエを始め、大学在籍時よりヤザキタケンに師事。これまでに矢内原美邦、高野裕子、渋谷陽菜の作品などに出演。関西若手コンテンポラリーダンス公演The bomb、舞台企画back☆pack主催。ダンサー、企画主催、レビュー執筆、指導など活動の幅を広げている。

渡辺美帆子(わたなべ みほこ)

1987年東京生まれ。演劇作家。日本大学芸術学部演劇学科演出コース卒業後、2012年まで劇団青年団に所属。2013年に別府清島アパルトメントにてアーティストインレジデンス。現在は俳優・美術家の遠藤麻衣とのユニット「二十一会」として活動。「へんなうごきサイファー」を全国各地で実施。「岸井戯曲を上演する」シリーズに参加。『魔笛、的、テキーラ!』や『食事会「ひばり」』の上演など。



川瀬亜衣『情報の保存』(a-room、京都、2017) 撮影：森本達郎

TOPIC 01

KAC Performing Arts Program 2018 / Contemporary Dance

シティ・II・III

京都芸術センターの創作環境を活かし、舞台表現の最前線の試みを紹介するKAC Performing Arts Program。今回は「都市」をテーマとした三部作の戯曲をもとに、京都を拠点に活動するアーティストによる三つのパフォーマンスを発表します。

タイトルロゴ：カヤヒロヤ/コニコ イラスト：高橋由季/コニコ

Profile

カゲヤマ気象台(戯曲)

1988年静岡県浜松市生まれ。早稲田大学第一文学部卒。東京と浜松の二都市を拠点として活動する。2008年に演劇プロジェクト「sons wo:」を設立。劇作・演出・音響デザインを手がける。2018年より「円盤に乗る派」に改名。2015年度よりセゾン文化財団ジュニア・フェローに選出。近作に『正気を保つために』(2018)、『流刑地エウロバ』(2018)、『シティIII』(2017、第17回AAF戯曲賞大賞受賞)など。

Profile

振子びじん(ねじびじん)

2004年まで大駱駝艦に所属し、磨赤兒に師事する。舞踏で培われた特異な身体を元に、自身の体に微視的なアプローチをしたソロダンスや、ダンサーの体を物質的に扱った振付作品を発表する。ダンス作品の他に、様々なジャンルのアーティストとの共同作業にも参加し、障がいをもった人たちとのワークショップや公演も行う。2011年、横浜ダンスコレクションEX審査員賞、フェスティバルトキョー公募プログラムF/Tアワード受賞。2016年、韓国・光州でアジアアン・ツシターが企画するOur Masters「土方巽」のキュレーターを務める。2017年より京都在住。生活にダンスの杭を打ち込むべく「ダンサーズ」を主催し、定期練習を行う。



日米ニュー・コネクション・プロジェクト『美整物-（例えば）を巡る』(京都、2014) 撮影：内堀義之

Profile

hyslom/ヒスロム

加藤至、星野文紀、吉田祐からなるアーティストグループ。2009年より活動をはじめ。造成地の探検で得た人やモノとの遭遇体験や違和感を表現の根幹に置き、身体を用いて土地を体験的に知るための遊び「フィールドプレイ」を各地で実践し映像や写真、パフォーマンス作品としてあらわす。またその記憶を彫刻作品や舞台、映画へと展開させている。2015年から任秀夫氏と共に「任・ヒスロム鳩舎」として日本鳩レース協会に入会。レース鳩に関するワークショップや展示などもおこなっている。主な展覧会に『ヒスロム 仮設する人』(せんだいメディアテーク6階ギャラリー4200、宮城、2018)、東アジア文化都市2017京都「アジア回廊 現代美術展」(元離宮二条城)。平成30年度京都市芸術文化特別奨励者。

京都の街は、古くから残る建築物や慣習を残しながらも、日々その姿を変えています。街の変容にしたがって、そこに暮らすわたしたちの生活や視点、しぐさといった振る舞いも、気付かないうちに、少しずつ変化していきます。そしてその変化は、身体そのものにも及んでいることでしょう。

今回、京都芸術センターでは、京都を拠点とし、異なる身体性や文脈を持つ、3組のアーティストによる新作パフォーマンスを上演します。

パフォーマンスに共通するテーマは「都市における身体」。今回は、創作の軸として劇作家のカゲヤマ気象台による戯曲、『シティI』『シティII』『シティIII』を用います。それぞれ「過去」・「現在」・「未来」をテーマとするこれらの戯曲は、特定の場所をモデルとしたものではなく、遠いどこかの街を舞台に、抽象的で詩的な空間が描かれています。

『シティI』に取り組む川瀬亜衣は、関西最若手のプロデューサーのうちの一人、ゆざわさなとの対話から、京都の街歩きを通じてその区画にある奇妙な緩衝地帯や、しぐさの重なり合いに注目しています。言葉と言葉、記憶とイメージの合間から、街の質感が立ち上がってくることでしょう。

身体を用いて土地を体験的に知るための遊び「フィールドプレイ」を展開し、東アジア文化都市2017京都「アジア回廊 現代美術展」での元離宮二条城における展示や、せんだいメディアテークでの個展などで話題を振りまくhyslom(加藤至、星野文紀、

吉田祐)は、彼らが継続してその姿を見守ってきた造成地の出来事から運動を生み出します。『シティII』という戯曲の骨組みに、彼らの土地での経験や実感を肉付けしていきます。近年は展示による展開の多かった彼らが改めて取り組むパフォーマンスは必見です。

振子びじんが振付・演出する『シティIII』は、愛知県芸術劇場でのAAF戯曲賞受賞記念公演を経て、関西圏在住の出演者とともにリクリエーションを行い、発表します。「作っているのは演劇、使っているのはダンスの力学」と語る振子は、愛知公演においてはテキストを真に受けて具現化していくこと、戯曲の言葉を揺さぶり、意味を置き去りにするような即物的な運動の連鎖を生み出しました。2017年に京都に移住した振子の、今まさに発見しているこの土地に住まう感覚は、どのような未来を想起するのでしょうか。

豊饒な文化が堆積し、多くの観光客を受け入れ、そして今なお発展を続けようとする京都。まったく異なる三つの踊りを通じて、この街に息づく身体の変化、感情の揺れ、街そのものの動きが、舞台に立ち上がります。

散歩しながら、スマートフォンを持つ前の身体がどんなふうだったかすっかり忘れてしまったことにふと気が付き、地下鉄が走る前や、街灯がともる前の街に、思いを馳せます。するといつも、その過去の身体への思い至れなさに愕然とし、同時に、未来の果てしなさと、それでもそこに人が生きているだろうという想像に、少し愉快な気持ちになりました。谷竜一(アートコーディネーター)



AAF戯曲賞受賞記念公演『シティIII』愛知公演(演出：振子びじん) 撮影：羽鳥直志 提供：愛知県芸術劇場

KAC Performing Arts Program 2018 / Contemporary Dance

シティI・II・III

日時：1月25日(金) 15:00(III) 17:30(I) 20:00(II)
26日(土) 15:00(I) 17:30(II) 20:00(III)
27日(日) 13:30(III) 16:00(II) 18:30(I)

会場：京都芸術センター

『シティI』

プロデューサー：ゆざわさな(The bomb) ドラマトゥルク：渡辺美帆子(二十一会)
振付：川瀬亜衣 出演：はっとりともか、畑中良太、古川友紀

『シティII』

パフォーマンス：hyslom(加藤至・星野文紀・吉田祐)

『シティIII』(第17回AAF戯曲賞受賞作品)

振付・演出：振子びじん 出演：佐久間新、振子びじん、増田美佳、三枝愛、持木永大

戯曲：カゲヤマ気象台

料金：【各演目】一般前売2,500円/一般当日3,000円、U25(前売のみ)1,000円

【3演目通し(50枚限定、前売のみ、予約日時指定)】前売5,500円/U25 2,500円

※イベント情報(P2)もご覧ください

TOPIC 02

Co-program カテゴリーA(共同制作)採択企画

神里雄大／岡崎藝術座

『いいかげんな訪問者の報告(アサード・おにぎり付き)』

神里雄大の新作は、過去の南米でのリサーチを振り返り、自ら出演するレクチャーパフォーマンスです。公演では、南米風焼肉「アサード」をじっくりと焼きながら、南米の地で出会った日系移民たちの足取りをたどります。12月末からの稽古開始を前に、制作に向けた意気込みを尋ねました。

——今年はずでに沖縄や東京でレクチャーパフォーマンスをされていますが、どのような経緯で始めたのでしょうか。

もともと別の取材で、南米に住む日本人移民の子孫を訪ねるといったのをやっていたのですが、ポリビアの「オキナワ移住地」に行ったとき、その若者のひとりから、「ずっと沖縄に憧れていたが、いざ沖縄に行ったら自分たちの存在が知られていなくて寂しかった」という話を聞いたことが大きなきっかけでした。ぼくも約100年前に沖縄からペルーに渡った移民の子孫にあたりますが、彼の気持ちがわかるような気がしました。というのも、沖縄に限らずぼくたちが住む日本には、100年以上前から世界各国に移民を送り出してきた歴史があります。でも、日本の(社会)で生活していると、「移民」という言葉は外からやってくる外国人のことを意味していて、

彼らとどう関わっていくかというところにしか話題がないように感じられてしまう。日本人／移民、日本文化／他の文化、みたいな分け方でしかそれを捉えられていないようです。自分たちのような日本人の中から外国に向かった、移民たちがいたということを単純に知らない、もしくはほとんど忘れてしまったように思います。

——確かに、国内にいと、海外に住む日本からの移民と直接関わったり、知る人から聞き出す機会は多くないかもしれませんね。

けれど、世界には、日本文化や日本語を継承しようとする人たちが、日本語も日本文化も忘れてしまった日本人の末裔など、さまざまなかたちで日本人と関連する人たちが住んでいて、それぞれ違った日本観みなのを持っている。ぼくは彼らと会って話を聞くことで、そういう、日本的なものが、実はそこまで確固たるものではないのでは? と考えました。言い方を換えれば、国とか文化とかって、もっと自由に国境を横断できるもの、という捉え方をしてもいいのではないかと。

——最後に、公演に向けて意気込みをお願いします。

この企画は、日本から外に飛び出して行った「移民者たち」の足取りやその後を見つめることで、日本というものを捉え直すという企画です。京都では、アルゼンチン風に牛肉を焼き、そこに住む日本人移民たちがそうするように、おにぎりも合わせる予定です。そうやって、味も匂いも総動員して、かの地に住む人々への想像力を刺激しつつ、ぼくたちが住む社会のことを振り返る機会にしたいと思っています。

Profile

神里雄大(かみさと ゆうだい)

作家、舞台演出家。岡崎藝術座主宰。2006年『しっぽをつかまれた欲望』で利賀演出家コンクール最優秀演出家賞、2018年『バルパライソの長い坂をくだる話』で第62回岸田國士戯曲賞を受賞。興味の赴くままに現地に出かけ、そこで見聞きしたことを外部者の視点でレポートするという方法で、わかりあえない他者との共時性をテーマとした作品を発表している。2016年、文化庁新進芸術家海外研修制度でアルゼンチン・ブエノスアイレスに1年間滞留。2011年度～2016年度公益財団法人セゾン文化財団ジュニア・フェロー。

現地に赴いた本人から報告を聞く、最もシンプルな情報伝達を、五感への刺激付きで。

堀越芽生子(アートコーディネーター)

神里雄大／岡崎藝術座『いいかげんな訪問者の報告(アサード・おにぎり付き)』

Co-program カテゴリーA(共同制作)採択企画。

日時：1月16日(水)～18日(金)19:00
19日(土)、20日(日)18:00

会場：フリースペース 出演：神里雄大
料金：一般3,500円、高校生以下1,000円(前売・当日共)
主催：岡崎藝術座、京都芸術センター
※イベント情報(P2)もご覧ください

2019年 新春 TARO便り

今年度の伝統芸能アーカイブ&リサーチオフィス(TARO)が力を入れている2つの取り組み、「伝統芸能文化復興・活性化共同プログラム」(以下「共同プログラム」と)、シンポジウムと公演からなる総合イベント「変わりゆく伝統芸能」についてお知らせします。

「共同プログラム」について

古典芸能、民俗芸能、それに関わる道具の制作といった各分野の活性化のためのプランを全国から公募しました。今年度、採択した以下の3件のプランがTAROとの共同事業として動き出しています。

一つ目の「上鳥羽の芸能六斎の復活を目指して——祇園囃子の創作」は、上鳥羽の六斎念仏に新演目「祇園囃子」を復活させようとする取り組みです。上鳥羽では、2011年以降、演じ手に小中学生を加えたり、外部から指導者を招くなどして、六斎念仏の改新に精力的に取り組んできました。伝統的な「念仏六斎」を今に伝える伝承団体と

して知られていますが、よりエンターテインメント性の高い「芸能六斎」を復活させるべく、これまでもいくつかの演目を再生させてきました。今回は、大正期以来中断していた「祇園囃子」の創作を通じて、民俗芸能継承に新たな潮流を発信することを目指します。現在、子どもたちが「祇園囃子」の稽古に打ち込んでいます。

二つ目は「柳川三味線のための胴皮新素材開発」です。柳川三味線は、胴皮が数ある三味線のなかでもとりわけ薄くことが特徴的です。近年、伝統的に用いられてきた猫皮の生産の減少により、安定した供給が難しくなっているため、和紙を用いた代替品を開発するのがこのプロジェクトです。和紙は製法によってはかなりの強度が得られるばかりか、スピーカーの音響板にも用いられるなど音響効果にも定評があります。現在、岐阜の研究所の協力のもと、三味線の胴皮に相応しい和紙の製作に取り組んでいます。

三つ目の「ゴッタン」の製造技法および基礎資料のアーカイブと交流ネットワークの創出」は、京都外から採用したプランです。「ゴッタン」とは、別名で箱三味線や板三味線とも呼ばれているように胴

の部分の木製の箱状のもので、練習用・初心者用の三味線として全国でも広く用いられています。しかし、南九州では荒武タミさんという伝説的な奏者が知られているように、独自のゴッタン文化が育まれてきました。そのゴッタンも今では製作できる職人が減少してきています。本プロジェクトでは、製作技術の記録、歴史的背景の調査、ネットワークの構築など、基礎調査を行います。

これら3つの取り組みは、年度末に成果の中間報告会を行う予定です。

総合イベント「変わりゆく伝統芸能」について

「変わりゆく伝統芸能」をテーマとしたシンポジウムと公演の2部構成のプログラムを、2019年2月3日(日)に開催します。鹿踊、讃岐獅子舞、備中神楽、京都・祇園祭から特色のある活動をしている団体をお招きして、第一部では現状報告とディスカッション、第二部ではそれぞれの実演を省略・再構成した形で披露します。伝統芸能を生きた形で現代に引き継ぐことはどのようにして可能なのか、討論と実際の演技を鑑賞しながら考える機会とします。

TAROでは、古典芸能や民俗芸能、それらに不可欠な道具及び材料、その製作に関わる伝統工芸技術などを総称して、伝統芸能文化と呼んでいます。伝統芸能文化の活性化のためのTAROの取り組みは、2011年の京都市の策定に端を発する「伝統芸能文化センター」の設立を目指して行っています。



綾傘鉦

伝統芸能文化創生プロジェクト シンポジウム&公演「変わりゆく伝統芸能」

日時：2月3日(日)14:00～17:00(開場13:30)
第一部 シンポジウム14:00～15:30
第二部 公演15:45～17:00

会場：講堂
出演：小岩秀太郎(東京鹿踊代表)、清水賢二郎(岡山県神社庁所属神楽師、備中神楽北山社、芳友会所属)、十川みつる(讃岐獅子舞保存会会長)、原田一樹(京都・祇園祭 綾傘鉦囃子方)ほか
第一部 ファシリテーター：依木悟(成城大学教授)
第二部 司会：小林昌廣(情報科学芸術大学院大学教授)
料金：無料
定員：120名(要事前申込)
※イベント情報(P2)もご覧ください



讃岐獅子舞

東京鹿踊

備中神楽

Since 1971
MAEDA'S COFFEE
KYOTO ART CENTER 1F
MIURAMACHI, TAKOYAKUSHI
NAKAGYOKU, KYOTO
TEL:075-221-2224
10:00～21:30 everyday

京都芸術センター叢書 二
「伝統芸能とはじめ」
小林昌廣 著 定価 3,456円(税込)
京都芸術センター窓口、もしくは下記ウェブサイトよりご注文いただけます。
<http://www.kac.or.jp/shop/>

京都芸術センター



交通案内
○市営地下鉄烏丸線「四條」駅／
阪急京都線「烏丸」駅22番出口・24番出口より徒歩5分。
○市バス「四條烏丸」下車、徒歩5分。
開館時間
○ギャラリー・図書室・情報コーナー 10:00～20:00
チケット窓口 10:00～21:30
○カフェ 10:00～21:30
○制作室、事務室 10:00～22:00
休館日
12月26日から1月4日
※設備点検のため臨時休館することがあります
〒604-8156
京都市中京区室町通錦薬師下る山伏山町546-2
TEL：075-213-1000 FAX：075-213-1004
E-mail：info@kac.or.jp URL：http://www.kac.or.jp/
twitter：@Kyoto_artcenter
facebook：http://www.facebook.com/kyotoartcenter

